

「韓国の反捕鯨運動」

李 善愛 (宮崎公立大学)

本研究は、韓国の反捕鯨運動が新自由主義とグローバル化の中で生み出されたものであることを環境運動団体の形成過程を通して明らかにする。韓国の反捕鯨運動は環境運動団体により始まり、近年は動物福祉や動物保護団体と連合して活動している。韓国の反捕鯨運動は世界政治経済の影響を受けた国内政治経済の変化によるものである。初期の環境運動は、1980年代から急速に成長していた社会民主化運動勢力の一部が公害問題解決のための団体を作って組織的に対応し始める。それに90年代末から旧ソ連や東ヨーロッパの社会主義崩壊は、社会主義的民主化運動勢力にも影響を及ぼし、環境運動は初期の民衆志向的な理念から市民運動に変わる。そして民衆中心の抵抗的特性が弱まり、反公害運動から環境運動に変わる。さらに活動内容も環境汚染地域民に対する支援活動だけではなく自然保全活動、反核運動、環境教育、会誌発行による環境情報提供、国際環境団体と連合して国際環境運動などに幅を広げていく。その中で蔚山を中心に環境運動団体による反捕鯨運動が始まる。ところが、90年代初期からの新自由主義と資本の世界化で、環境汚染は減っていたが、多くの失業者や不完全雇用状態が量産され、多くの失業者が市民運動に流入し、その市民運動団体が職場となる。そして巨大化した環境運動団体は、個人の後援金や会費だけでは維持や運営が難しく、安定した運営資金を確保するため企業からの支援が絶対的に必要である。しかし、企業から寄付を受ける環境運動団体は企業を対象に環境運動をし難く、環境問題にろくに対応できない問題を孕んでいる。そのため環境運動の対象は、企業との直接的な対置を回避して経済発展という名目で開発事業を行う政府が中心である。